元ゆひに文七元結とて、上品の稱とす、俗說に、これは切元結のことにて、ふるくは輪元結のみ、長きまゝ、綰ねたるを、浪華の俠士雁金文七といふもの、常にさかり場にはいかいし、鬪諍あれば、生きて再びかへらざるの勇を示さんため、元結をゆひ切り、その死を決するをあらはしゝかば、切元結の短かきを文七元結と、人みないへりとかや、この說ひがことなり、案ずるに、紫一本に、永坂の下にて、文七髻結とて、名物の元結をこしらふなり、文七といへるものゝこしらへ侍るかとたづねければ、ある老人の物語に、文七といふは、元結にこしらふ杉原紙の印の名なりと申されき、元結車にてよるなりと見えたり、かく彼俠士の時代よりふるき名目なり、この說を正しとすべし、

〔類柑子上〕北の窓

わが栖む北鄰に蘆荻しげくおひて、笹阿めなる地あり、茅場町といふ、略○中れいの男等、機車みつ輪もて來りて、くゐせのかたはらに玄つらひけり、文七といふ者、もとゆひこく所に成ぬる也、略○中元結こく音、ひるは日ぐらしに聞まじへて、又ことさらの心ちしたり、山姥の廻り來ぬ所にこそ、五百機たつるにはあらで、くる〳〵と卷とりたる車のたえまには、百舌の尾ふりの聲、玄たり顏なる虻蜂などの羽音にもかよひてけしからず、略○中

文七にふまるな庭のかたつふり　角

元結のぬる間はかなし虫の聲

大絃はさらすもとひに落つる雁

〔嬉遊笑覽容儀一下〕はね元結、今あるものは、近頃のものとみゆ、もとは今いふ長ながの紙のたちし樣なるして結たるが、その末上にそりたるさま、古畫にかけるがある是なり、思ふに今はんがけと兒女子のいふめる、是ははねがけにて、はね元ゆひを省き云なり、かくて後、色々染紙して作れるも